

神戸

011

見本

(令七文後)

小論文

- ・問題は1～8ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

次の文章は、真木悠介『時間の比較社会学』（一九八一年）の一節である（ただし、一部に変更がある）。これを読んで、あとの問いに三に答えなさい。

北アメリカのホピ族の文化、とりわけ言語体系について調査したベンジャミン・ウォーフはその時間の観念についてつぎのように報告している。

ホピ族にとつて時間は、かつてなされたことのすべてが「のちになってゆく」ということであるから、おなじようなくりかえしは浪費されるのではなく、蓄積されるのである。それはあとのできごとにまでもちこすような、目に見えない変化を蓄積することである。すでにみたとおり、それはいわば日のくりかえしが同一人の再訪と感じられているようなものである。いくらか後ではあるが、昨日とおなじ特徴をもっているものであり、「別な日」つまりまったくの別人のようではないのである。

「すでにみたとおり」とウォーフが書いているのは、つぎのようなことだ。

英語では「十日間」ということをいうのに *ten days* と日の複数形をつかう。それはあたかも *ten men* と、べつべつの人間たちが十人いるときの表現の仕方と同じだ。すなわち英語を話す人びとは、今日や昨日や明日というそれぞれの日を、べつべつの日として意識している。ドイツ語やフランス語でも事情はおなじだ。ウォーフはこれら標準的なヨーロッパ諸語を、SAE(Standard Average European)として一括して話をすすめる。

けれどもホピの文法ではこのようには表現されない。ホピにも複数形はあり、「十人の人間たち」のように、客観的に複数である集団にそれは用いられるが、「十日間」は複数とはみなされていない。昨日や今日や明日というそれぞれの日は「別の日」ではなく、同じ日がくりかえし再現されるという感覚をもっているのだ。それは十人の人間たちでなく、一人の人間のくりかえしなされる再

訪と同型のものだ。「十日間滞在した」(the stayed ten days) ような事実をつたえるときには「十一日目まで滞在した」(the stayed until the eleventh day)とか「十日目ののちに去った」(he left after the tenth day)という表現をとるので、日の複数形がなくて困るということはない。

このことは一般にホビの言語で、過去が現在と区別されないという事実と照応している。昨日あつて今日ないことはSAEの文化では「ないこと」に入るが、ホビの文化では「あること」に入る。すなわち以前の日にあつたことは、同じ日の再現である今日の日のなかに刻みこまれて蓄積している。過去は帰無することなしに現在しつづける。

このように蓄積されてゆく時間の感覚は、ホビの言語にばかりではなく、雨乞いや豊作を祈る儀式としてのホビ族の舞踏のような、行動文化にもあらわれている。

過去・現在・未来というヨーロッパ文化の区分にたいして、ホビの世界はまず基本的に、つぎの二つの宇宙形式から成っている。すなわち顕現された(manifested)と顕現されつつある(manifesting) (あるいは、まだ顕現されていない(unmanifest))、ないしは、客観的(objective)と主観的(subjective)と、近似的によぶことのできるものである。〈顕現されたもの〉あるいは〈客観的なもの〉とは、「歴史性を内在する物理的な宇宙」であつて、過去と現在は無差別にこの中にはいる。〈顕現されつつあるもの〉あるいは〈主観的なもの〉とは、われわれが未来とよぶものすべてを含むがそれだけではなく、ホビの人たちに言わせれば、〈魂の中に現われたり存在したりするもの〉である。重要なことは、それが人間の魂の中だけでなく、「動物、植物、無生物の魂の中、そして自然のあらゆる形、姿の裏や内部にあつて自然の魂の中にも現われ存在するものである」ということだ。「未来」のすべてがそのなかに含まれるのも、このことにもとづくだろう。

このような、人間と自然との連続性の感覚が、ホビの文化で、〈現在する過去〉の感覚とむすびついていることに、^①ここでは注目しておこう。

エドモンド・リーチの『人類学再考』のなかに、「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」が収録されている。「聖なる時間と俗なる時間」についてのエリアーデらの展開や、「ハレとケの循環」についての日本民俗学の成果になじんでいるものにとつて、

リーチのエッセイは一見すると、その才気のある表現と興味深い事例分析の追加以外には、理論的にオリジナルなところはないかのようにみえる。けれども従来の聖俗時間論の諸系譜にたいして、リーチがつぎのように、微妙でありながら本質的な差異を明確に述べていることが注目されねばならない。

もし時間というものが無限の過去から無限の未来へ向かつてのびる整合された直線であるかのように、われわれが考えないとするならば、われわれは時間を一つの円かあるいはある循環として記述するだろう。これは純粹に幾何学的な比喻である。だが、われわれが実際に経験するような時間には、本質的に何ら、幾何学的なものも存在しない。……未開の素朴な社会にあつては、繰り返しの比喻には、はるかに身近なものを使ったであろう。たとえば、それは嘔吐や機織人の梭の振動、一連の農耕活動、また婚姻関係をめぐる一連の儀礼的交換などであるが、われわれがこのような一つながりになったものを「サイクル」として記述するとき、われわれは知らず知らず、当該の人の思考にはまったく存在しないと思われる幾何学的な表現法をそこに導入しているのである。

近代の時間論がしばしば時間の觀念の二つの基礎的な類型として設定するように、〈直線としての時間〉にたいする〈円環としての時間〉という考え方には、すでにわれわれの先入見である「時間は連続的に動いてゆくはずだ」という前提が入りこんでいる。古代インドや古代ギリシャの文明における〈円環する時間〉にたいして、リーチはいつそう原的な時間の感覚として〈振動する時間〉を対置する。

実際、いくつかの未開社会においては、時間の経過は、……同じ方向へたえず進行してゆくという感覚も、また同じ輪のまわりをまわり続けるという感覚も存在しない……。反対に、時間は、持続しない何か、繰り返す逆転の反復、対極間を振動することの連続として経験される。すなわち、夜と昼、冬と夏、乾燥と洪水、老齡と若さ、生と死という具合にである。このよう

な図式にあつては、過去は何ら「深さ」をもつものではない。すべての過去は等しく過去である。それは単に現在の対立物にかすぎない。

時間が「繰り返し現われる対立の不連続」という概念は、おそらく時間に関するすべての考え方のうちでもっとも基本的でもっとも原初的なものであると私は考えている。

過去が現在の「対立物である」ということは、一見すると、過去が現在とおなじものであるという、ホピ族についてのウォーフの報告と対立するように思われる。けれども両者は、ほんとうはおなじ世界をべつな言葉で表現している。

過去が「深さをもつものでなく」、すべての過去がひとしく過去として現在に対立しているような世界において、たとえば現在〈昼〉であるならば、すべての〈夜〉はたがいに同等に過去として現在に対立している。そして同様にすべての〈昼〉は、この〈夜〉と対立する時としてくりかえし現在してくる。リーチが「対立する」というのはこの〈昼〉と〈夜〉とのあいだの関係であり、ウォーフが「同一のもの」の再現というのは、この〈昼〉とわれわれのいう「他の」すべての〈昼〉とのあいだの関係である。

したがってリーチのいう「過去」はほんとうは過去というよりも潜在する現在であり、舞台裏で待機しているもうひとつの時空に他ならないだろう。

リーチははじめにわれわれ自身の時間の観念に、「それぞれ論理的に異なり、矛盾し合いさえする二つの異なつた種類の経験がふくまれている」ことを述べている。すなわち第一に「くりかえし」の概念——脈搏みやくはくや日や月や季節のめぐりなどの反復。そして第二に「くりかえしはない」という概念——生まれ、育ち、老いて死ぬ人生の不可逆性など。そして両者は、われわれのつぎの二つの基本的経験に由来するものとリーチは考えている。すなわち

- (一) 自然の現象はくりかえすものだ
- (二) 人生の変化はもとにもどらない

自然と人生のこの対照は、対象それじたいの差異にもとづくものでなく、われわれが人間のみの個別性に執着するゆえに両者の時間を異なった位相においてみることの結果に他ならない。われわれがたとえば一匹の犬の個別性に愛着するならば、この犬の老いや死という時間もまたそのひとにとつて、人生の不可逆性とおなじくとりかえしのつかない一回性としてあらわれるだろう。逆にわれわれがある異邦人の「蛮族」を、ひとりひとりの個別性に関心を払うことなく、ただ特定の季節とともに略奪におしよせてくる大群としてのみみるならば、われわれにとつてこの「蛮族」は、洪水のようにくりかえす自然の時間の現象のひとつにすぎないものだろう。

メキシコのオトミ族の素朴なうたには、自然の時間から剝離してゆく不可逆性として感受される人生の時間にたいする、原初の感懐のようなものがうたわれている。

川は流れて

流れてやまぬ

風は流れて

流れてやまぬ

人生は流れて

かえらない。

レヴィ・ストロースの『野生の思考』のなかの一章「再び見出された時」は、文化人類学者による時間についての最も徹底した考察のひとつといえよう。

〈共時としての通時〉として把握することのできるその理論的骨子については別の機会にとりあげてみることにして、問題の提起のみを課題とする本稿においては、〈野生の思考〉一般の時間観念の象徴的典拠としてレヴィ・ストロースのあげているチュ、リ、ン、

ガのみを引照しておこう。

オーストラリア中部の先住民のあいだにひろくみられる「チューリング」について、まずレイーストロス自身の紹介のことはを引用しておこう。

チューリングとは御存じの通り石か木で作られた物体で、形はほぼ楕円形をしており、両端は尖^{とが}っていることも丸味を帯びていることもある。そして多くはその上に象徴記号が彫り込まれている。しかし時には、単なる木片か石ころで、なにも加工されていない場合もある。外観がどうであれ、チューリングはそれぞれきまつたある一人の先祖の肉体を表わす。そして代々、その先祖の生まれ変わりと考えられる生者に厳かに授けられるのである。チューリングは、人のよく通る道から遠い自然の岩陰に積んで隠しておく。定期的にそれを取り出して調べ、手で触ってみる。またそのたびごとに磨き、油をひき、色を塗る。それとともにチューリングに祈り、呪文を唱えることを忘れない。

すなわちチューリングはひとりの人間が、ある先祖の生まれ変わりであるということをも物的に確証するよすがなのであり、このチューリングをとおして人は、祖先から自我、そして子孫へと、再現する同じ人間としての、自我をこえたアイデンティティを所有する。「物的に現在化された過去」というふうには、レイーストロスはチューリングの時間論的な役割を表現している。

この地域の先住民の中に生まれ育った民族学者であるストレーロウは、かれらにとっての景観の意味をつぎのように証言している。

山や小川や泉や沼は、先住民にとっては単なる美しい景色や興味ある景観にとどまるものではない……。それらはいずれも彼の先祖の誰かが作り出したものなのである。自分を取り巻く景観の中に、彼は敬愛する不滅の存在(祖先)の功業を読みとる。これらの存在はいまも、ごく短期間、人間の形をとることができ、その多くを彼は父や祖父や兄弟や母や姉妹として直接的経

験で知っている。その土地全体が彼にとつては、昔からあつて今も生きてゐる一つの家系図のようなものである。先住民はそれぞれ各自のトーテム祖先の歴史をつぎのように考える。それは、今日われわれの知つてゐる世界を作り上げた全能の手がまだその世界を保持してゐた天地開闢かいびやくの時代・生命の曙あけぼのの時代に対する、先住民一人一人の自分自身の行動の關係なのである。すなわち自然的な景観はいわば、展ひ開かされたチ、ユ、リ、ン、ガとして（物的に現在化された過去なのであり、歴史をこえたアイデンティティの基盤をなしている。北アメリカのホピ族についてウォーフのいう事実とも呼応しながら、それはひとつの持続する共同態の、「歴史性を内在する物理的な宇宙」として現在しつづける過去だ。

ストレーロウがいうように、「こんにち白人が——ときにはわざとでなしに——先祖の土地を汚したことを語るとき、北アラランダ族の男の目には涙が浮かぶ」のは、自然と人間のあり方が近代文明の世界のそれとは異質のものであるからだ。

人格と物格、主体と客体を原的に異質のものとして対峙たいじせしめるわれわれの社会の世界把握にたいして、かれらの世界把握のなかでは、人格と物格の原的な区分はないし、「対象的」世界は主体の存立そのものの契機として感覺される。

アメリカ先住民の世界の白人による解体の歴史のなかで、白人によるかれらの略奪や殺傷にたいして以上に、自然の破壊や土地からの追放にたいして、かれらが深い怒りと絶望を示したという事実がいくつも伝えられている。これは近代の価値観からみると奇妙に非合理的な倒錯にみえるけれども、これらの土地土地||自然こそがかれらのすべての過去を現在化せしめていたものであり、そのことによつてかれらの存在を、たしかな恒常性として保証してゐたものであつた。^③白人は先住民を殺害することのでその生を奪うけれども、その土地||自然を解体し接收すること、たんにその生のみならずその死をも奪うのである。これらの破壊と追放によつてはじめて、これらの先住民たちは死というものを、近代人の考えるような死として、すなわち絶対の帰無として感覺し、戦慄せんりつすることができたはずである。かれらにとつてこの時、過去はもはやないものとなつたのであり、そして現在も、やがて無化するであらうものとなる。

これらのことは、虚無化してゆく時間というひとつの觀念、あるいは生きられる感覺が、自然にたいする人間の自立と疎外とい

う、ひとつの文化と社会の形態とかわわっている、という仮説をわれわれに示唆するように思われる。

問一 傍線部①「〔現在する過去〕の感覚」とはどのようなものか。三〇〇字以内で説明しなさい。(配点四〇点)

問二 傍線部②「両者は、ほんとうはおなじ世界をべつな言葉で表現している」とあるが、どのようなことか、四〇〇字以内で説明しなさい。(配点六〇点)

問三 傍線部③「白人は先住民を殺害することによってその生を奪うけれども、その土地に自然を解体し接收することによって、たんにその生のみならずその死をも奪うのである」とはどのようなことをふまえて、人間と自然との関係についてあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。(配点一〇〇点)